

## 『東アジアの思想と文化』の刊行にあたり——「出会いの知」のために

桂島 宣弘

一九八〇年代以降の冷戦の崩壊、マルクス主義の劇的後退、ポストモダンの隆盛などを受けて、既存の諸学問のデイシプリンの枠組みが鋭く問われ始めるようになった。歴史学や思想史学に関していえば、一国史の枠組みの歴史性が問われ始め、また一九世紀以来の西洋人文学に根ざすその政治性への問いかけやオリエンタリズム批判も相まって、今やアジア的・東アジア的視点の重要性が声高に叫ばれる状況となった。こうした状況は、冷戦崩壊後、戦後五〇年弱にして、ようやくにしてアジア・東アジアと向き合わざるをえなくなった日本の国際環境も反映しているという意味では、決して偶然の事態ではないと考えられる。また、殊にそれまで歴史事象や思想の意味づけなどを一国の枠組みでしか説明してこなかった日本史・日本思想史にとっては、その叙述の歴史性・政治性を初めて問いかけるものである点に注目するならば、有効に作用した側面があるといえよう。

だが、早くもアジア・東アジアと向き合うことに失敗したかに見える現下の日本政府の醜悪な有り様が象徴しているように、「アジアから」「東アジアから」ということは、既存のデイシプリンを刷新

する特効薬として、さほど楽天的に語りうるものではないことは、いうまでもない。何よりも一九世紀後半～二〇世紀前半期に、(帝国日本の学知)は、アジア・東アジアという視点を強調することでアジア・東アジアに対する収奪・侵略を行ってきた歴史的事実を直視するならば、そして戦後五〇～六〇年、その点を学問的に検討することをほとんど放棄してきたことにこそ現下の日本におけるデイシプリンの危機の一つの側面があることを勘案するならば、アジア・東アジアという視点が孕む歴史性・政治性の検討抜きに、それを語りだすことは、むしろ問題を更に増幅するものであることは明らかである。

かく考えるならば、『東アジアの思想と文化』という視点(そして雑誌名)は、きわめてリスクの大きいものであることは、いうまでもない。このリスクについては、戦後早くに竹内好が(方法としてのアジア)としてのべているところであり、最近でも子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか』(藤原書店、二〇〇三年)などが鋭く切開しているところでもある。この雑誌が企図しているのは、したがって、実体としてアジア・東アジアの思想・文化を捉えその検証

をすることでも、竹内好のいう方法としてのアジア・東アジアを蒸しかえし的に提示することでもない。願っていることは、ようやくにして始まったアジア・東アジアの若き学徒たちの知的交流・共鳴関係、換言するならば「出会いの知」を率直に表明する場として、この雑誌が成長していくことである。ささやかな願いではあるが、それもまた一九世紀以来の学知の根底にナショナルイデオロギイが厳然と存在し、かつわれわれがそれをほとんど解体しえていないという意味では、決して安易なものではないといわなければならない。だが、「出会いの知」においては、まずはそのことが率直に表明されることこそ重要だとわれわれは考えている。解釈の差などにはとどまらない、ほとんど議論できないくらいに、個々のアジア・東アジアの歴史学・思想史学は頑強に枠組みを保持しているのだから。ここからしか、われわれは始まることはできないのだ。

なお、この雑誌は関西・京都における主として中国、台湾、韓国、およびアメリカ・ドイツなどから留学して日本研究にたずさわっているもの、および日本人による研究会が基盤となっているが、無論そこに安住しているわけではない。やや大胆ない方になるが、あらゆる地域・あらゆる学知に対して開かれた場を目指していきたいというのが、現在の研究会の全メンバーの願いでもある。大方の参加・投稿・批判を心から願うものである。

二〇〇六年六月

東アジア思想文化研究会を代表して

(立命館大学文学部教授)